
あの頃のキミと僕へ・・・

月見 侑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの頃のキミと僕へ・・・

【Nコード】

N8981A

【作者名】

月見 侑

【あらすじ】

田舎から都会に出てきた僕は毎日が閉塞感でいっぱいだった。毎日せわしなく働いていても生きている実感のない毎日だった。そんな折、旧友から一枚の手紙が届く。それは同窓会開催の手紙だった。僕は自然と過去を振り返るようになり忘れていた記憶を探る。そして、一枚の古びた手紙を見つける・・・

第1話：同窓会へ・・・

目覚し時計が鳴った。なぜこういふときの目覚し時計は姿をくらますのだろつと頭で考えていた。布団のそばにあるはずの目覚し時計なのに探しても探しても目覚し時計に触れることができなかった。しょうがないので体を起こし、音の方にまだ線のような目を向けた。

「・・・なんで棚の上にあんの？」

目覚まし時計はコンポやら書物やらが陳列されているラックの最上段にぼつんと置かれていた。

「あー、そついや・・・」

そうだった。昨日の晩、明日は早く起きようとわざと目覚し時計をわざわざあんなところに置いたのだった。おかげさまで目覚し時計と昨日の僕にいつぱいくわされた朝になった。

「・・・余計なことしなきゃよかったな」

布団から這い出ると目覚まし時計を止めてカーテンを開けた。太陽はあいかわらず強すぎる光で大歓迎してくれた。

洗面台で洗顔と歯磨きを済ませ、朝食を作った。パンとブラックのコーヒーとハムエッグだ。テレビからはどっかの国の内戦の情報が流れていてコメンテーターがそれについて解説していた。まだ覚めない目でそれを見つめパンをさくさく食べていた。

「んゝ、眠い・・・」

ブラックのコーヒーもまだ眠気には効果が現れず寝ようと思えば椅子に掛けたままでも寝れるほどだった。僕はパンを飲むようにして食べ終え、コーヒーを一気に飲んで朝食を終えた。そして田舎に帰る仕度をし始めた。

田舎から都会に状況してきてもう8年がたっていた。別に都会へのあこがれがあつたわけじゃなかった。ただ、このまま田舎で働き、適当に就職して適当に結婚して適当に子供を産んで適当に死んでいくのは避けたかった。そう思うとやはり都会になんらかの期待があつたのか、今でも考えてしまうものだった。僕の田舎と都会の考えはともかく、結局都会での生活は閉塞感でいっぱいだった。休まる日がなかった。かといって田舎に帰る決心もなく、ずるずるここまでするまで来たのだった。

そんな折だった。田舎の旧友から一通の手紙が届いた。普段あまりポストに手紙が入る事はないので、なんだかちよつとうれしかった。手紙の内容は高校の同窓会の開催だった。日時や場所が記載されていた後に手書きで「今年はちゃんと来いよ！みんなお前に会いたがつてるぞ」と書かれていてちよつと面食らった。僕は4年前の同窓会には出なかった。仕事が沢山あつたし、なによりこんな疲れきった顔で会えるものかと思っていた。もうとつくに忘れられていると思つたのに・・・

返事を出すのに3日かかった。いろいろ考えていた。今あつたら皆になんて言われるだろうとか、クラスにどんなやつがいたかとか、そんなことだった。結局同窓会に出ることにして、その旨を返事にした。正直、田舎の連中に都会での生活や愚痴をたれて普段は得ることのできない優劣な気分を味わいたかった。そうすることで不幸

自慢するほど僕は大変なんだよ、田舎で暮らしているやつらには分らないだろうけどなどと思いたかったのかもしれない。最終的にはそんな不純な動機が僕を田舎の同窓会へ向かう決心を固めさせた。でも、正直怖かった。そんなこと思うようにしていても、変わりきってしまった僕を見て皆が哀れむような目で見られたら、同情されたりしたらと思うと怖くて仕方なかった。

結局、僕は無機質な社会で育て上げた哀れな自尊心と旧友達をさげすむ気持ちと弱い心を携えて田舎にむかうことになったのだった。

とりあえず田舎へ帰る準備は簡単に終わった。有給は3日だったのでそう長居はできなかったし、する気もなかった。有給をとるときにも上司に文句を言われつつづけたのを思い出してため息をついた。

新幹線が出るまでまだ時間がありまっていた。かといって外に出る気分でもないので卒業アルバムを見ることにした。卒業アルバムは埃まみれになっていた。田舎からこっちに来るのに、寂しいだろうから一応持ってきたのだが、結局最初だけでそれ以降、今日まで開くことはなかった。

パラパラとめくると自分のクラスのページになった。そこにはもうどこにもいないかつての自分がぎこちなく笑っていた。そうだ、なかなか笑顔ができないので友達がカメラマンの後ろで笑わせてきたのを思い出した。だからなんか我慢したような笑顔になってるんだ。僕は笑ってしまった。

手紙を出してきた旧友はうまく笑っていた。妨害する前にOKだった。僕もみんなも「つまんねー」といったのを思い出した。

そのまま自分のクラスを見ていると一人の女の子に目が止まった。その子もなんだか我慢したような笑顔をレンズに収められていた。

「なつかしいな・・・元気かな」

その子は小、中、高校時代に仲の良かった女の子だった。恋人ではないが友達以上といったところか。笑顔がかわいい女の子だった。決して美人ではないが周囲の人間を元気にするようなそんな子だった。よく遊んだし、よく話した仲だった。そういえばこっちに来るときも見送りに来ていた。目に涙を浮かべて「しょっちゅう戻ってきてね」としきりに言っていた。僕は「すぐに戻ってくるよ。連休があつたらすぐに。」・・・本気でそう思っていた。結局、僕は戻らなかった・・・

そういえば・・・

彼女が最後に言った言葉を思い出した。

「ねえ、向こうについたら制服の胸ポケット見て・・・それと、忘れないでね、私のこと」

制服の胸ポケット・・・？そういえばこっちにくるときに持ってたんだった。僕は卒業アルバムを膝からどかして、クローゼットに向かった。しかし、クローゼットの中に制服はなかった。確かに持ってきたはずなのに。目を下に向けると未開封のダンボールがあった。僕は急いで引つ張り出し、ガムテープをはがした。中には高校時代の物があつた。

「意外と未練がましかつたんだな・・・」

制服を探しながら思った。制服はすぐに見つかった。そのほうに
たたまずに丸めてあった。埃やらなんやらがいつぱいできたなかつ
たのでベランダではたいした。ソファアに座り制服の胸ポケットを探
ると一枚の手紙が出てきた。なんだかあの頃の匂いがしたような気
がした。一気に懐かしさの気持ちで胸がいつぱいになった。手も震
えていた。

「いつのまにこんなもの・・・」

僕はおそろおそろ緊張してあの時の香りがする彼女の手紙を開いた・
・・

第2話：時をまたいだキミの手紙・・・

古びた手紙には当時の彼女の切実な想いが記されていた・・・

『これを見る頃にはもう新しく生活するところに着いたかな？（なんかドラマみたいだね。ちょっと恥ずかしいかも）とにかく、面と向かうと恥ずかしくて言えないこと、たくさんあります。なので手紙にしました。

初めて会ったのは小学校だったね。覚えてる？私がブランコから落ちて膝すりむいて泣いてたときに保健室に連れてってくれたね？あの時は私誰も友達がいなくて誰もそばにいないくて寂しかった。だからキミが駆け寄って心配してくれてすぐうれしかった。安心して涙が止まらなくてキミ、オロオロしてたね。とにかくすごいうれしかった。そして、キミが初めての友達になってくれたね。内気だった私を後押ししてくれてみんなの輪の中に入るようにしてくれて、おかげで私、友達沢山できたよ。今でも付き合いあるんだよ？知ってた？とにかくありがとう。

中学生になってもキミは私の一番大事な友達だったね。覚えてる？学級委員長だった私が文化祭の出し物決めようとした時、（なんであの頃の男子って妙に斜に構えてるんだろうね）男子がうるさくて何にもできなかった時に「うるせえ」って叫んでくれたね。おかげで男子は静かになって無事に出し物が決まったね。でも、そのおかげでキミが演劇の主役になっちゃったんだよね。今でも覚えてる。まさに大根役者とはこのことだね！って思った。

受験の時は私がお世話したね。思えば助けられてばかりの私がやっとなキミを助けることができた時だね。勉強はじめるとすぐに眠くなる癖、もう治った？とにかく私のおかげで無事合格できて良かった。私はきつと、キミよりもうれしかったと思う。また一緒に生活できるんだからさ。

高校は、いちばん濃い生活だった。キミも私も部活に入って、試合

があつたらお互い応援しに行つてさ。最後の大会の時、私負けちゃつて、大泣きしちゃつた時一晩中そばにいてくれたね。えーと、このことは忘れてください。恥ずかしい思い出だから。とか言つとキミは絶対「なら覚えてるよ！」とか言つて忘れてくれないんだろうね。意地悪だからさ。

そういえばケンカも沢山したね。いつも君が折れて謝つてくるのが弱いんだから。そういうところちゃんと直さないとそつちに行つたら生きていけないんじゃない？大丈夫かな？ちよつと心配です。

なんか言いたことつていうか思い出綴っただけになつちゃうね。これでも何回も消したりしたんだけど、書いてるところなっちゃうから、仕方ないよね（開き直りかな？）

正直、キミがいなくなるの嫌です。もうずっといたのに、いなくなっちゃうの？つてね。こないだ理由知つた時は正直悔しかったよ。

「このまま田舎でつまんなく人生終えたくない」つて、正直泣いちゃいました。だって、私はキミのなににもなれなかつたんだなってさ。多分そんなことないつて言うんだろうね。でも、そうなんだよ、それは。でも、私止めません。私に留める権利はないもの。

なんだか長くなつちやつたね。このまま読まれて「ホームシックにかかつた」とか言われても困るからさ、ここらへんで終わります。まだまだキミに伝えたいこと沢山あります。今度は会つて伝えたいだから、約束してください。4年後の2月11日、初めて話したあの公園のブランコのところに来てください。私をすこしでも想つてくれているなら、それだけでいいから。私待つてるから。

新しい土地であなたがいつものように明るく、健康で、幸せであることを祈ります。

またね

『

彼女の手紙にさよならは無かった。

僕は自分が泣いているのに今気づいた。古びてやけ果てた紙に僕の涙が染み込んでいた。涙が止まらないのは初めてだった。なんでこんなに自分のことを心配してくれている人を忘れていたのだろうか。

「なんで、なんでこんなん書くんだよ・・・約束って・・・もう4年も過ぎてんじゃないか。俺、馬鹿じゃん・・・」

手紙の最後には普段自分をお願いをしない彼女が僕に約束をお願いしていた。4年前、初めて会ったブランコ・・・

4年前、彼女は僕を待っていたのだろうか。冬の寒い時に白い息を吐きながら冷たくなった手を温めていたのだろうか・・・どれくらい待ったのだろうか。

「その頃、俺、お前のこと・・・何にも考えてなかった・・・ゴメン、ゴメンな」

手紙に向かって何回も何回も謝った。

ふと、カレンダーを見つめた。なんですぐに気づかなかったのか・・・

「2月11日・・・今日じゃねえかよ！」

約束の時はもう過ぎてしまったけれど、もう戻ってこないけれど行かないやならない。

約束を果たしに、約束から4年後の今日に、

僕は涙を拭くと旅行カバンを持って手紙をポケットに閉まって玄関から出た。

「ごめんな・・・今度こそ、果たさなきゃ」

自然と僕は走り出していた・・・

第2話：時をまたいだキミの手紙・・・（後書き）

是非感想ください。すごい励みになるしとてもうれしいです！よろしくおねがいいたします

第3話：腐った自分（前書き）

更新が全然できなくて読者皆様、本当にすみませんでした。感想・批判等頂けたらうれしいです。

第3話：腐った自分

10時の東北新幹線に乗って僕は山形に向かっていた。

多分、あの手紙を見る前に向かっていたとしたら、僕の帰郷は短いものだったに違いない。今はとにかく長くて長くて仕方がなかった。車窓から見える景色もゆっくりゆっくり僕の眼の端から見えなくなっていく。そうだ、なんて言おう。公園にいらなくてもあいつの家に行こう。謝らなきゃ。ずいぶん待たせてしまった。怒ってるかな…どうしてるかな…でも、

本当に待つてるのかな…？

ふとそんな考えが頭をよぎった。もうあれから何年もたっている。約束の4年後でさえ待ってたのだろうか？人の気持ちなんて簡単に裏返ってどこかに去ってしまうんだ。簡単に田舎の友人をきってしまった僕のように。まして、学生の頃の恋人遊びのような約束に、なんて。なんで手紙を読んだときに泣いたのか…今考えたら恥ずかしい話だ。たぶん、不意打ちだったんだ。記憶に残らないような生活の中でいきなり頭の中をくすぐられたからに違いない。なにも期待するべきではないんだ。第一本当に待ってたとしてもなんて言えればいい？

「ごめん、忙しくて忘れてたんだ。すまない。これからやり直そう」
とでも言うつもりか。さすがにそんな虫のいい男じゃない。

最低だ。僕はいつからこんな最低な人間になり下がってしまったのか。いまさらあいつに会いたい自分とあいつを疑ってしまう自分が同居していてもうどうしたらいいのかわからない。最低だ……いったいなにが僕をこんなに腐った人間にしてしまったのか？無機質な都会での生活か？いまさら出てきた手紙か？それとも僕自身なのか。

会えない

こんな気持ちのままで会うことなんてできない。会っても何も変わらない。どちらにも無駄に傷ついておしまいだ。そうだ、時間は戻せない。あのころの僕と彼女の関係には戻れない。帰るんだ。山形にいたらすぐにでも帰りの電車に乗ろう。決めた。会うべきじゃないんだ。

車窓から見える景色はもう都会の景色と一緒だった。

第4話：旧友

新幹線が山形着き、乗客はせかせかと外に向かっていった。僕だけが、僕の足だけが動こうとしない。

落ち着け、すぐに帰れる。改札を出たらすぐに切符を買った。それでおしまいだ。震える足を叩いて僕はサッと立って歩きだした。

正直、僕は怖かったのだろう。もしかして、誰かに見つかるかもしれない。今、会ったなんていいばいい？どんな顔をしたらいい？自意識過剰だろうが、かまわない。誰にも僕の姿を見られなくなかった。すぐに帰るのだ。この空気はいやだ。この場所もいやだ。早く帰りたい、あの無機質だけど生温くて気持ちいい世界に。

僕はあたりを見回すように改札から出て切符売場に向かった。

「お、来た来た！待ってたぞ？」

いきなり目の前に現れた顔人間は僕に向かってそう言うと言った。本当に心臓が止まるような一瞬であるのかと思った。目の前にいる男はまぎれもなく僕に同窓会の手紙を送ってきた男だった。

「あいかわらず時間ぴったりだな。って当たり前だな。新幹線で来たんだしな。…久し振りだな。元気にしてたか？」

男はそう言つと、僕の荷物を手にとって歩き出した。真っ白になっていた僕は、あわてて言葉をひねり出した。

「なんで、お前がいるんだ？武…」

武は振り返ると笑いだした。

「なんでって…お前が手紙よこしたんだべ？返事に新幹線の時間書いてよこしたじゃん。」

衝撃だった。そうだったのだ。僕は丁寧に新幹線の発車時刻を書いて返事を書いたのだった。また、僕自身にしてやられたんだ。

「ああ、そうだったな。武、元気だったか？今日はわざわざありがとう。」

とりあえず動揺した姿は見せられないんだ。できるだけ冷静に返事をした。武はまるで高校時代からそのまま素直に生きてきたようで、そのままだった。

「ああ、俺は元気だったよ？あいかわらずこっちは何にも変わってねえ。お前は？」

もう武を直視できなくなっていた。なぜか知らないけど胸が圧迫されて今にも泣きそうだ。なんで、なんでそんなに笑っているのか…

「僕は、元気だったよ。都会での生活も楽しくてな、だから前の同窓会は出れなかったんだ。ごめん。今回も来るか迷ったんだけど、どうしてもみんなに会いたくなってさ…んで、こうして来たんだ。」

武は笑顔から一瞬真面目な顔になって僕の眼を見てきたが、すぐに笑顔になって、言った。

「そつかそつか。元気ならよかったよ。心配したんだからよ？」

武は僕の手荷物を右の肩に持ち替えて、くるっと僕のほうを向いた。僕は一瞬おびえたようになった。武は笑いながら言った。

「おめえ、「僕」なんて言ったっけ？」

「は…？」

僕は武が言ってるこの意味がよくわからなかった。ただえええ今はここから逃げ出したい一心なのに…。

「お前は、もうあん時のお前じゃねえんだな…」

武は悲しく笑いながら消え入るような声で言って、また歩いて行つた。なんだかとても落ち込んでいるみたいだった。僕は武が言った意味がよくわからなかった。

僕は帰ることができなくなった。どうやら駅の外は雨が降っているらしく、床は濡れ、空気はじめじめしていた。

第5話：誓い（前書き）

更新が全然できないため読んでくれる人は限りなくすくないと思います。それでも自分の小説を誰かに見てもらえるというのは幸せですね。感想お待ちしております。

第5話：誓い

案の定、山形の空は灰色で、したたる雨はなにか懐かしいにおいがした。

武はビニール傘を俺に手渡しして手招きした。僕はできるだけ笑顔で礼を言つて傘を開いた。

武の車はまさに便利な乗り物としての役割しかなさそうだった。手入れはされておらず、ボディには泥が跳ねている。それが彼らしいと思つた。

武は高校の時からずぼらだった。机の中は見るに堪えないものだったし、体操服は半年に一度洗濯していたぐらいだ。僕はどちらかというと几帳面な方だった。なぜ武と親友になれたのだろうと考えてみても埒があかないので考えないようにしていた。あの頃は何も考えずに親友でいられたのに…

武に促され助手席に乗ると微かに匂いがした。武は僕はスンスンしているのに気づいたのか軽く笑つてため息をついた。

「ラベンダーだ」

「ラベンダー？そんな趣味あつたのか？」

武は軽く自嘲しながらサイドブレーキを下ろした。武の車はずいぶん使いならされているのだろう、スムーズに進んだ。

「うちの嫁さんの趣味だよ。俺が「らべんだー」なんて嗅ぐ性質にみえるか？」

僕はシートベルトをつけながら確かにと言った。武が結婚したのは3年前か…

「結局、お前は俺の結婚式にも来てくれなかったしな。盛大だったんだぞ！」

だんだん緊張がほぐれてきた。武はハンドルから手を放し大きく手を広げた。彼の持ち味が僕をリラックスさせる。

「ごめん。仕事がい」

「忙しかったってか？まあ、いいけどな」

何もかも見透かされたような気分だった。僕の薄っぺらい言い訳は終えることなく途絶えた。武はしょうがないと2回繰り返した。気を使ってくれているのが辛い。緊張はまた僕を掴む。窓の外は小雨になっていた。それでも湿り気のある空気が首元にまとわりつくような気がした。居住まいが悪くなったのか、武は音楽をかけた。ジャズだった。しかもバラード。

「え…」

「奥さんの趣味だって」

武はひとり言のように言った。なんだか武は変わってしまったようだ…そんな気がした。それとも、僕だけが違う空間にすぎたのか。無機質でモノクロの生活、暗い空に汚れた空気。そんなものが僕を変らせてしまったのか。つまらなく弱い人間に。

上京したとき新宿駅の人ごみを見て冷汗が出たのを覚えている。会社員がよく通る時間帯だったっていうのもあるかもしれないが、本当に灰色の世界だった。各々決められた場所へ戻っていくような、鎖で繋がれた獣がもがくような、自由に歩いているようなのに束縛されているような…そんな光景だった。

そうだ。あの時、僕は誓ったじゃないか…

僕は、僕だけはこのモノクロの世界で頑張って色を纏っていようって…

大きなバッグと大きな不安と大きな誓いを抱いて新宿駅のと真ん中にたっていたじゃないか。

「誓ったじゃないか…」

もうほとんど降っていない雨に向かって、その向こうの雲に向かって僕は言った。

武はこっちをちよつと見ていたようだが、僕が前を見ると素早く何食わぬ顔をした。僕は軽く笑った。

「変ったようで、変わってねえのかな？」

武は眼前に広がるきれいな世界に、青い世界に向かって言った。その声は空に向かって吸い込まれた、ような気がした。

雨あがりの故郷はラベンダーとジャズ、青い世界に白い雲に包まれ

ていた。

もうすぐ到着だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8981a/>

あの頃のキミと僕へ・・・

2010年12月9日04時58分発行